

海獸葡萄鏡の研究 (一)

—— 名称 について ——

一

昭和四七年三月、世紀の発見と騒がれた壁画古墳高松塚から、一面の海獸葡萄鏡が出現し、壁画の存在に霞みがちではあったものの、あらためてその名をわれわれに印象づけたのであった。

海獸葡萄鏡における最も大きい問題は、なんといってもその多様な図文、豊富な遺品の体系的整理、別ないい方をすれば、絶対年代化を伴った編年的研究にあると思う。高松塚出土を契機に、樋口隆康氏が発表された研究もその一端であり、かつては私もそれを試みたことがあった。しかし、海獸葡萄鏡はこれまでのところ一つとして紀年銘がないこと（これは唐鏡の大部分に共通する）、伝世古にせよ土中古にせよ作品の製作時期をはっきり押えられる遺品がないことなど悪条件が重なっているため、これらの研究もお時間の洗礼が必要であろう。

このような、困難ではあるが興味つきない問題がある一方では、この種の鏡に与えられたその特異な名称が、どういうこととも同時にわれわれの関心を惹いてきた。名は実の實であるという命題に照して、その名称がはたしてそれにふさわしいのかどうか、ふさわしくないとすれば、どういった名称が適切であるのか、つまり實の實質を備えた新しい名称が必要となるわけであるが、こうした点についてはいささか混みいった手続きが必要と思われるし、その余裕もないので、ここではひ

服 部 匡 延

とまず所与の名称の由来を探るということに論点を絞って考えてみたい。

二

海獸葡萄鏡は、鏡背図文の要素として現実に葡萄唐草文を鑄だしているから、それには問題はない。問題は海獸の方にあるわけであるが、この種の鏡がはじめて図録化されたのは、現在みるところ宋代に編輯された『宣和博古図録』(以下『博古図』)においてであって、同書が名づけている海馬・蒲萄・鑑というのが名称のはじめの姿であり、先般物故された原田淑人氏に従えば、それは宋人自身による命名であるらしい(後述)。とすれば、われわれはまたこの海馬についても当然考えていなくてはならないわけである。

それでは『博古図』には海獸という名称が用いられていないのかという点、そうではないのであって、文字の上からいえば海獸・鑑および海獸・蒲萄・鑑なるものが同時に記載されているのである。ただ、鏡背の図文からいうと、前者はいまならば神獸鏡と呼ぶであろうものであり、後者は禽獸八稜鏡とも呼ぶであろうように、いわゆる海獸葡萄鏡と呼ぶ鏡ではない。しかし海獸は後述するように、海馬という名称もしくは文字と密接な関係をもっていると考えるので、『博古図』上に同時に現われた名称として、この二つを結びつつ見ていくことにする。

現在われわれが取扱っている『博古図』は、泊如齋重修、宝古堂重修、

亦政堂重修など、いずれも後人の手を経たものであって、これらをもつて直ちに「原博古図」と同等にみなしてよいかどうか疑問の残るところであるが、いまのところはこの重修諸本に頼らざるを得ないことをお断りしておきたい。

『博古図』は鼎・鬲類を筆頭にして三〇の目をたてている。鑑つまり鏡類は末尾の卷二八―三〇を占め、海馬・海獣の名称をもつた鏡を含む生物系図文の一群は、漢器とみなされたもの二〇面が卷二九の後半に、唐器とみなされたもの一五面が卷三〇の前半に集められ、「竜鳳門」という総称で一括されている。これから述べることも関連するので、その必要上、この竜鳳門に包括された鏡の名称を鏡型・鈕式を補足しつつ一通り転載、一覧表にしておく。

仮番号	名称	鏡型	鈕式
1	漢蟠螭鑑	円鏡	半球鈕
2	〃 竜鳳鑑	〃	〃
3	〃 竜鶴鑑	〃	〃
4	〃 單竜鑑	〃	〃
5	〃 虎竜鑑	〃	〃
6	〃 双鳳鑑	〃	〃
7	〃 鳳馬鑑	八稜鏡	獸鈕
8	〃 雉馬鑑	円鏡	半球鈕
9	〃 竜麟鑑	〃	〃
10	〃 六花鑑	〃	〃
11	〃 海獣鑑	〃	〃
12	〃 海馬蒲萄鑑	〃	〃
13	〃	〃	〃
14	〃	〃	〃
15	〃	〃	〃

16	漢海馬蒲萄鑑	円鏡	半球鈕
17	〃	〃	獸鈕
18	〃 海貝方鑑	方鏡	(未詳)
19	〃 海獣朱鳳鑑	八稜鏡	半球鈕
20	〃 海馬俊猊鑑	〃	獸鈕
21	唐竜鑑	円鏡	半球鈕
22	〃 雲竜鑑	〃	〃
23	〃 雲竜八花鑑	八花鏡	〃
24	〃 雲竜花雀鑑 (図欠)	〃	〃
25	〃 舞鳳俊猊鑑	八稜鏡	半球鈕
26	〃 鸞鳳鏡 (図欠)	〃	〃
27	〃 蓮鳳鑑	円鏡	半球鈕
28	〃 鳳銜花鑑	〃	獸鈕
29	〃 鹿鳳蒲萄鑑	〃	〃
30	〃 象鑑	〃	半球鈕
31	〃 燒食食鑑	〃	〃
32	〃 瑞図鑑	〃	(博山鈕?)
33	〃 宝花鑑	八稜鏡	半球鈕
34	〃 海獣鑑	〃	獸鈕
35	〃 海獣蒲萄鑑	〃	〃

この場での鏡の配列は、竜鳳門の総称にふさわしく、まず竜・鳳を図文にもつたものが前に置かれ、漢器の部では海馬は同じ馬があつても鳳馬・雉馬のグループには入らず、海獣と混り合いつつ海字を共通項として、後の方でグループピングされている。これは一つの特徴で、唐器の部においてもわずかに二面ではあるが、海獣は最後尾でグループピングされていることと一致する。

以上、この段階ではいわゆる海獣蒲萄鏡が、まずはじめに『博古図』

においてどのように掲載され、取扱われているかを確認しておくに留めておこう。

三

葡萄鏡における海馬や海獣の名称が、これまでどのように解釈されてきたかを、私見を述べるに先だつて、まずフリードリッヒ・ヒルトの所説からみてみよう。

『博古図』の考定にもとづき、海馬蒲萄鑑を漢代の遺器と信じたヒルトは、海馬という名称もやはり漢代にはじまったと考えた。そしていったんは「海馬の海は海外の義にして、海馬とは外国の馬の意ならんか」としたものの中途でこれを否定し、この名称はもともと動物には関係ないもので、葡萄・葡萄酒の神祭ディオニソス祭と関係ある東方イラン地方のハオマ祭のハオマという音が、葡萄文様とともに中国に伝流してハイマと転訛し、海馬の字が充てられたのであろう、とした。海獣については「海馬蒲萄鏡の中にも馬の模様なく」かえつて獅子形その他の動物の形が多くみとめられることから、後世の人が馬の字を獣にかえて海獣としたもので、「博古図録の鏡の或者の如き」

(前表の35あたりを指すものようである)はそれである、と述べている。つまり『博古図』上に並置されている海馬・海獣のうち、海馬は漢代の命名、海獣は後代の命名で、獣は馬の置き換えと考えたわけである。

海獣蒲萄鏡が大体において唐鏡であるということは現在公認のことであるが、ヒルトがそれを漢器とみたのは研究発展途上の一定段階における限界としてやむをえないことと思う。問題は海馬蒲萄鏡に馬形のないことを強調しすぎたことであつて、それによつて「獅子形その他の動物の形」の方をクローズ・アップさせ、馬でもないものに海馬と名づけた理由として、結局海馬の名称は図文の動物とは関係のない、音の転用と解したのは牽強付会といわざるをえない。『博古図』において、海馬狻猊鑑(表20)については多少問題があるのでちに述べるが、六面の海馬蒲萄鑑中、先頭の二面(表12・13)では外区に明白に

馬形が鑄出されているのである。それ以下の四面にはヒルトのいうように馬形はないが、これらにも海馬の名称を冠したのは、先頭に配置した二面をもつてグループを代表させ、それに名づけた海馬蒲萄鑑の名称をもつて同類図文の鏡を一括したのであつて、ちょうど生物系図文の鏡を一括して竜鳳門としたような、分類作業上の操作にすぎないと私は考えている。馬形の図文をもつ二面が、とにかくグループのトップに配置されていることは意味のないことではないと思う。

そこで、ヒルトが海馬の名称は漢代の命名、海獣は後世の案出であると述べたことについても、当然検討する必要があるわけであるが、この点に決着をつけたと思われるのが原田淑人氏である。

『博古図』以前について、文様の宝庫ともいふべき織物を中心とした文様の名称をひろく検証された同氏は、それらからついに海馬とか海獣とかの名称が検出できないことから、この名称は「博古図以前に殊に宋以前に於て斯う云う名称は無かつた」ものであり、それは「博古図編纂当時宋人に依つて附せられた名前のやう」であると考えられた。適切な見解だと思ふ。とすれば、海馬と海獣は命名の時期をずらして考えたりしてはいけない、ということになる。

さらに、上記の見解に立脚して原田氏は、海馬・海獣を「或は海外から来た馬とか、或は海外から来た獣であるとか云ふ意味で葡萄と併せて是が漢の武帝の時あたりに出来た鏡だろうと云ふ想像から付けられた名前だろう」と説かれたのである。海馬についてはのちに別個に私見を述べ、海獣についてはまた私見をもつて補足するつもりであるが、以上原田氏説は総じて穏当な所説だと思ふ。

なお、ヒルトが途中で放棄した「外国の馬」説が説得力を帯びて、このようなかたちで再生されたことはヒルトにとつては皮肉であつた。その後、正木直彦氏が中国における霊獣思想を、狻猊に焦点をあわせつつ探るといふ視角からこの問題にも触れて、「海獣とは海外の獣といふ程の意で恐らく獅子のことであらう」とし、かつ「恐らく海馬の称は有翼の天馬文様を呼ぶことに起源を發し、獅子文様は海獣の名

を以て称されたと思ふ」と説かれたのは、原田氏説を継承しつつさらに一步具体化したものといえよう。

さて、高松塚出土鏡の考察にもなつて、従来のこうした見解に異見をたてられたのが冒頭にも紹介した樋口隆康氏である。同氏は『博古図』が「海馬葡萄鏡」としてあげている鏡には、天馬の図文があることを正当に指摘され、その天馬に関して『隋書』西域伝、吐谷渾条の

青海中有小山、其俗至冬水、輒放三牝馬於其上、言得竜種。吐谷渾嘗得波斯草馬、放入海、因生二駿駒、能日行二千里、故時称二青海駿一焉。(同氏引用、句読による)

という一節に関連づけて、「博古図録の著者は、天馬の図をこの説話にあて「青海の馬」から「海馬」の名をとつたのではなからうか」と推理し、同じ史料を引く『三才図絵』（明・王圻撰）がやはりこれを海馬とするのをあげて、自説を裏打ちしておられる。また、海獣については清初成立の『西清古鑑』が、この種の鏡を海獣としていることをあげ、それは「天馬以外のいわゆる獅子形獣の方が数多く図文の中にみられるため「海獣」としたのであろう」と述べられた。

樋口氏が引用された『隋書』の一節は、石田英一郎氏も取り扱われた水馬竜種伝説の一事象として世界的規模の民間信仰へつながるもので、この面から海馬を論じられたことは問題把握の構想としては大きいものがある。しかし、海馬と海獣は名称成立の時期をずらして考えではないかという原田氏説を支持する私の立場からすると、海馬の海が青海（ククノール）の海だとすると、海獣もまた青海の獣でなければ辻つまが合わなくなり、私としては従えない。ただし、『西清古鑑』は図文の実状に合わせて馬を獣にすげかえ、機械的に海馬の海をそれに貼り合わせたという意味の同氏の所見は、『博古図』と『西清古鑑』との関係における限り妥当だと思われる。

以上、主要な四つの所説を大略紹介したわけであるが、つぎに第五

説として私の見解を述べてみよう。

四

海馬・海獣が『博古図』編輯当時、宋人によって案出された名称であろうということはすでに書いた。そこで、もういちど出発点である『博古図』そのものを再点検することからはじめたい。

『博古図』は鼎彝から鑑まで全三〇目の図録であるが、ここで各目は冒頭にそれぞれ「総説」がついている。鑑の部についてももちろん「総説」があるのであって、いまはそれに注意を喚起したい。従来どうもこの「総説」を等閑視してきたのではないか、という疑いがあるからである。

「総説」において『博古図』の編者は、鏡の製作・器型・材質・銘文の意義とか分類配列の序次の原則とかについて解説している。たとえば「是以圖者規天、方者法地、六出所三以象三諸物一、八方所三以定三其位一」とあるのは器型に関する意義づけであり、「凡五金之序、黄金為上、白金次之、銅又次之、而鉄錫為下」、しかし現実に金や白金の鏡はないから図録では「故斯鑑以鉄銅先焉、鉄次之」として、材質の別による配列序次の原則を明確にしている、といった具合である。このようなことが図文に関しても適用されていることに注目しなければならぬ。

丁寧引用するといささか長文になるので、ここでは海馬葡萄鏡（つまりいわゆる海獣葡萄鏡）が所属する竜鳳門に関する部分を摘記する。

（上略）以竜蟠二其上者、取二諸竜護之象一也。以鳳飾二其後一者、取二諸舞鸞之說一也。以至下或為二異花奇卉海獸天馬羽毛鱗甲之属一、或為中嘉禾合璧比目連理瑞世之珍（下略）上。

この部分は竜鳳門に編入された図文の意義ないし根拠を説くはずのくだりである。竜と鳳とは文字通り竜鳳門の代表であるから、この二つについてのみは「竜護之象」とか「舞鸞之說」とか図文の根拠づけ

をしているが、それ以外は多分省略したのであろう。このなかに海獣の名称がみえる。そしてついでに、海獣につづいて天馬の名称がみえることも強調しておこう。

つぎに図文による鏡の配列については

(上略) 頌必有二致_ス養_テ之道_ニ、故次_レ之_ニ以_テ二枚乳_ヲ。而乳者_、養_レ人之道也。有_レ所_レ養_レ則_レ鳥獸草木莫_レ下_レ不_レ咸_レ若_レ而來_レ儀_、為_レ瑞者有_レ上_レ之。故又次_レ之_ニ以_テ二竜鳳花鳥海獸_一也。然而大功者_、若_レ拙_、繪事素後。則純素者其本也。於_レ是又_ニ以_テ二純素_一終焉。

として、その原則を提示している。ここにもまた、竜鳳・花鳥とともに海獣の名称がみえている。

右二条の文章は鏡背の図文を総括的に取りあげているに過ぎず、したがってそこで使用された名辞や用字がそのまま個々の鏡の名称にも用いられているわけでは必ずしもない。たとえば異花・奇卉はそのままの姿では現われず六花(表10)、八花(23)、宝花(33)といったように表記され、羽毛・鱗甲も虎(5)、雉(8)、麟(9)、雀(24)、鹿(29)といったように具体化して現わされている。

しかし、また同時にそのまま名称化されているものも、もちろんあるのであって、主格の竜鳳はそのまま竜鳳鑑(表2)となり、竜と鳳と分解して一字となればこれはもう枚挙に遑ない。

「総説」と鏡個々の名称とのこのような関係を要約すると、「総説」中の名辞は、名称として、ある場合にはストレートに、ある場合にはもつと具体化して使用されている。これを逆な方向からいうと、名称は直接的・間接的な差はあれ、なんらかのかたちで「総説」中に言及がある、ということが大体においていえるであろう。

そこで問題の海馬・海獣であるが、海獣の方は「総説」にもみえるし、名称そのものにも生かされている(表11・19・34・35)。

では海馬の方はどうか。表12 | 17・20にみえる海馬は、そのままストレートには「総説」中に記載されてはいない。しかし、「総説」と名称との、右に要約したような関係からすれば、海馬と「総説」の天

馬とが密接な関係にあると考えるのは当然の成りゆきであろう。そうになると、問題はその関係がどういものであるのか、ということになる。

海馬のほかに鳳馬鑑(表7)と雉馬鑑(表8)の馬もまた鏡名に適用された天馬の姿だといえる。前者は鳳凰と天馬、後者は雉子と天馬の合成ということが出来る。

そこでこんどは右二面の図文に当ってそれをみると、胸のあたりから背中の上方向にかけてひれ(肩巾)状のものを靡かせて疾走する姿の馬形が描かれている。ところが、これと同じような馬形が、じつは海馬蒲萄鑑の筆頭二面の外区にも描かれているのである(第一図)。鳳馬鑑・雉馬鑑の馬が天馬ならば、これもまた天馬といべきであろう。それと同時に、この二面の蒲萄鑑の内区には、外区のものより大型のかつそれとはことなつて、有翼の馬形も描かれているが、これはいわゆるペガサスそのものであって、これもまた天馬といべきであろう(第二図)。

思うに、中国では太陽とともに天空を飛走するという想像的・思想的な天馬のほか、あるいはそれ以上に関心を惹いた馬は大宛の汗血馬であつて、これが天馬思想や竜馬信仰と結合しつつ天馬の子とされ、さらに天馬にも昇格していったことを考え合わせると、ひれ状をひるがえした方の馬は、あるいは汗血馬を描いたものかも知れず、ひれ状のものは疾走に際してほとぼしらせたとその熱気もしくは天馬空を行く、その雲気の表現とも思われる。

しかし、いずれにせよ『博古図』の編者は、ひれを靡かせた馬にせよ有翼の馬にせよ、どちらをも天馬とみなして「総説」に書いたのにならちがいあるまい。鏡の命名にあたっては、それを何故に天馬とせず海馬としたのだろうか。

天馬は思想としてすでに土着化した面もあつたにせよ、なお依然として海外それも西方世界の産物とする正当な認識もあつたであろうから、天馬を海外の馬すなわち海馬と称したのだということも可能だろ

うが、しかし天馬という周知にして歴史的なる名称を、わざわざ異様な海馬という名称に変更する必要がどこにあったのだろうか。

「総説」から前掲引用のあとの方、竜鳳門における配列序次の原則を述べた「次レ之以二竜鳳花鳥海獸一」を、実際に図録に当って検証してみると、表でもわかるように大体がその原則に従っていて、まず竜で一括したものが先頭を占め、鳳がこれにつき、おわりの方で海獸が出てきている。花鳥に相当する部分が必ずしもすっきりしていないが、それでも表8で雉、10で花、また23で花、24で花と雀、28・33で花といったように竜鳳と海獸との中間に配置されていて、原則はほぼ生かされているのである。

そこで問題の海獸の部であるが、とくに表の前半に例をとり名称の点からいうと、まず表11で海獸鑑がトップに立つのは当然として、以下は12―17の海馬、18の海貝、19でふたたび海獸が出てきて最後の20でまた海馬となるように、名称が入り乱れている。この場合の配列は、これもまた前掲の器型の意義づけ、すなわち「圍者規レ天、方者法レ地、六出者所三以象二諸物一、八方者所三以定二其位一」を配列の原則とし、表11―17は円鏡、18は方鏡、19・20は八稜鏡の順に並べられている。名称はばらばらに散らばっているが、器型において一定原則下に整序されていることがわかる。

さてそうなると、海獸はもちろん海馬や海貝も、海獸という汎称のもとに一括されるものと『博古図』の編者には考えられていたことになる。それでは、馬も四足獣の一種であるから海馬は一種の海獸なのであろうか。さらに海獸としての海貝とは何であらうか。

もういちど「総説」における竜鳳門の図文に関する解説のくだり、「或為二異花奇卉海獸天馬羽毛鱗甲之属一」に注目したい。これによると『博古図』の編者は、天馬と海獸とを一線を郭して明確に意識している。天馬は天馬なのである。それがどうして海馬と名称されて、海獸の名においてグループピングされるのであろうか。

海獸鑑グループ、表11―20・34・35の図文を観察すると、11の海獸

鑑では四組みの神像と四面の獸面がある(第三図)。その他、銘帯に「天王日月」を二行に書いた方形一二個があり、いまならば天王日月鏡とか神獸鏡とか呼ぶものであるが、これを海獸鑑としたのは『博古図』の編者が、正面を向いて口に棒状のものを銜えたその獸面に着目し、これを海獸と呼んで命名したのであろう。12の海馬蒲萄鑑(第四図)では外区に四体、内区に八体(鈕を含む)の獸が描かれ、あるものは力走する姿、あるものは匍伏し、あるものは仰向けに顛倒したような姿など、さまざまな図形である。以下、海貝方鑑がわずかに小さく一面の獸面を現わしているのを除き、すべてこのような四足獸を描いているのである。これらが海獸と呼ばれたものにちがいないし、またそうなればすべてに海獸が含まれていることにもなる。であるからこそ、それら一群の鏡を海獸の名のもとに一括することもできたのであろう。

さて、このような見方を他の海馬蒲萄鑑にも適用すると、そこにもすべてに海獸が存在しているものとみるべきであらう。そこで前出の「異花奇卉海獸天馬羽毛鱗甲」にふたたび注目したい。字句の区切り、別ないい方をすれば繋がりが問題であるが、異花・奇卉はともに植物で花・卉と熟するように、これは異花・奇卉の四字一句としていい。羽・毛・鱗・甲については、羽・鵲(表3)、雉(同8)などの鳥類を指し、毛は虎(同5)、鱗(同9)、狡狴(同20・25)などの獸類を指し、鱗は蟠螭(同1)、罽毼(同4)、甲は図文の面から多少問題があるがあるいは貝(同18)に相当させているのかも知れない。いずれにせよ一字一義の集合であり、もしそうではなくて編者が羽毛を鳥類、鱗甲を魚介類というように総括的に考えていたとしても、羽鱗と熟する語があるように、一は空中、一は水中といった空間的対比において対句的であり、これも羽毛鱗甲の四字で括ることができよう。残るのは海獸と天馬であるが、これにも海と天という空間的対比性、両者ともに四足獸という共通性をもっているなどのことから、これも海獸天馬の四字一句に固定化することができよう。

これまで縷々述べてきたことを組み合せて、ここで結論を引き出す。すなわち「総説」に従えば海馬蒲萄鑑の馬はあくまで天馬であって海馬ではない。そこで海字を馬と切りはなして考えたとすると、同鏡は「総説」においては海獣の序列に、図においては海獣鑑以下に分類されていること、図文には海獣と呼ばれたものらしい獣形を有すること、「総説」において海・獸・天・馬と連称されていることなどからいって、この海字は海獣から引いてきたものではないか。つまり海馬は海獣天馬のはじめとおわりの字を借りてそれをつづめ、その二字に四字の内容を圧縮したのであろうというのが当面の私見である。つづめた理由は海・獸・天・馬・蒲・萄・鑑としたのでは、名称として長くなり過ぎるとい判断が『博古図』の編者にあつたからであろう。竜鳳門に限ってみても、鏡名は象・鑑の象一字、鳳・銜・花・鑑の三字を例外として二字、四字をもってするのを原則としているらしくみえ、五字以上のものはないことからそのように考えられるのである。

海馬の二字を名称に含んでいる鏡のうち、海馬蒲萄鑑の三六（表14—17）と海馬狻猊鑑（表20）は図文に馬形がないにもかかわらず海馬となっている。前者四面は分類上の操作であろうことを前節で述べおいた。けれども器型もまったくが図文も異相を呈する八稜鏡に、海馬を付したのは理解しがたい。ただ強いて理由を考えてみると、この鏡と同型同文のものが海獣蒲萄鑑（表35）となっていることや、またこの鏡のすぐ前に並んでいる近似の図文をもつた八稜鏡が海獣朱鳳鑑となっていることからすると、その海馬は『博古図』編者のミスあるいは命名方針の不徹底、もしくは重修過程での誤刻かも知れず、本来、海・獸・狻猊鑑とあつたものかとも想像される。

また、海貝方鑑の海貝は海獣と貝の合成ということになるが、その取合せはまことに破格であつて理解しにくい面がある。図文は内区に獸形と人物形の各一体および実体不明の植物文、外区に鳥形が一つと蓮らしき図文その他の植物文が描かれており、貝字に相当するようなものはみえない。後考に埃つほかないが、あるいは螺鈿でも施したも

のであろうか。しばらく判断を保留しておきたい。

五

最後に海獣について、これを「海外から来た獣」という意味で名付けられたのであろうとする原田淑人氏の説を継承する方向で、多少補足的に考察しよう。

竜鳳門に属する鏡名のなかから、獸またはそれに準ずる動物名をひろつてみると、蟠螭・竜・鼉・虎・馬・麟・狻猊・鹿・象・鬣・鬣・鬣などが挙げられる。つまり『博古図』の編者が同定しえたものについては、それに相当する具体的な名前を与えているわけである。それに比して、海獣などという捉えどころない曖昧な名称をつけたのは、編者が特定の動物名を与えることができなかったか、あるいは敢えて曖昧かつ概念的な名称をつけたとしか考えようがない。

表11の海獣鑑において（第三図）、棒状のものを嚙えた正面形を強調した四体の動物は同一種類と思われるが、これを海獣としたのは編者が適当かつ具体的な動物名を考えつかなかつたのであろう。

『博古図』の鏡背図文は、おそらく専門の画工によつて実際の鏡から転写されたものであろうが、その正確さや精密さは我われにとつて不満がないわけではない。しかし、そこに描かれたままの姿が、図文に対する彼等の観察であり把握であつた。そこにある程度の杜撰はあるにしても、虎を描いて猫となるという冗談はここでは通用しない。

このような判断に立つてまた『博古図』の図文を観察すると、例えば表12の海馬蒲萄鑑一（第四図）では内区に獸鈕を加えて八体（うち一体は幼獸）、外区に四体の獸形が描かれている。なかに、正木直彦氏がたがいわれたように獅子といえはいるような獸形もある一方、それに限定できないようなものもあつて、単純ではない。表16の海馬蒲萄鑑五（第五図）では内区に六体、外区に四体の獸形があり、いずれも浅毛類らしく描かれているもの、あるものは背面に線条文をもつ一方、あるものは無文、あるものは頸が多少長く、あるものは短か

目である。表34の海獸鑑は内区に獅子状の獸鈕、外区に四体の獸形があるが、うち二体はあるいは竜かとも思われる点状文のもの、他の二体は説明困難なほど略画化されており、獸形を精密に把握しえなかつたことを示している。表35の海獸蒲萄鑑（第六図）では内区のみに獸鈕を加えて五体の獸形があるが、一体は一角獸様、一体は双角獸様である。

海獸鑑類の獸形は、あらまし観察してみてもこのように多様なのであって、さらに走る、腹匍う、蹲踞する、立ち上がるなどの姿勢によつては、同じ動物を描いたものにしても異つてみえるという変化が加つて、ますます複雑なものになつていく。したがつて、この多様性に対して、ある特定の動物名をつけて図文の内容を限定することはそもそも無理にちがいない。図文のこうした実状と、海獸という曖昧かつ非限定的な名称との結びつきから考えて、海獸というのはその多様な獸形群をカバーする、いわば汎称として用いられたのではあるまいか。以上を要約すれば、『博古図』編者が図文の獸形に特定の名称を与えられなかつたこと、それに加えて対象の多様性によつてもまた具体的な名称を与えられず、汎称として非限定的な海獸をもつてした、ということになる。

それでは、そのようにして用いられた海獸の海はどのような意味をもっているのか。

中国国内での既成の獸名に比定されず、かつ限定不可能な多様な獸形という図文の性格に加え、「総説」において海獸が西方世界との繋がり強い天馬と連称されていること、ついでまた西方伝来の葡萄とも結合しえて鏡名を形成していること、つまり海獸がそうした西方産物と矛盾なく結合しうる名称であることなどから、この場合の海は中国国外、つまり原田淑人氏の述べられた海外の意味であり、海獸は海外の獸であろうと考へたい。

海字はじつにさまざまな意味を含んでいるが、『本草綱目』卷三〇、海紅の釈名に、いわゆる海獸葡萄鏡の盛行期である唐代の、李德裕の

『花木記』を引いて「凡花木名レ海者、皆從レ二海外一來」という海字の用法は参考になるであろう。徳裕に『花木記』のあることは、『旧唐書』李德裕伝にもみえ、『本草綱目』の引用はほぼ信用できる。

清・呉其濬の『植物名実図攷長編』卷一六、海紅条では「凡今草木、以レ海為レ名者、西陽雜俎云、唐賛皇李德裕嘗言、花名中之帶レ海者、悉從レ二海外一來。故知、海櫻・海柳・海石榴・海木瓜之類、俱無レ聞二於記述一。豈以レ多而為レ称耶、又非レ多也」とあり、海字はある時期、たぐさんの意味に解されたことがあつたらしい。この意味で海獸を考えると、獸形の多様性や体数の面で説明はできるが、天馬との繋がりなどの点で満足できないところが出てくる。

其濬はまた杜甫の海櫻行七言「欲裁二北苑一不レ可レ得、惟有二西域胡僧識一」を引いているが、これによつて、西方から渡来した胡僧だけが知つていた海櫻は、やはり西方の、いわば国外の植物であるわけであり、海字がまたそうした意味での形容詞として用いられたことが、ここにもうかがえるのである。『博古図』もこの用法を継承したのであろう。

おわりに、これまで説いてきたような内容での海馬・海獸とは別な存在について簡単に整理しておく。

宋・洪邁の『夷堅志』甲志・卷八の海馬条には「紹興八年、広州西海墻地、名二上弓湾一。月夜有二海獸一、状如レ馬。蹄鬣皆丹」とあり、宋・楊億の『楊文公談苑』（『格致鏡原』卷八五所引）では「海馬骨、水火俱不レ能レ毀。惟馭以二腐糟一随毀」という海馬もみえる。明・黄衷の『海語』卷中のものは「海馬、色赤黄、高者八九尺。逸如二飛竜一。山食而宅レ海。蓋竜種也」とあり、清・陸次雲の『訳史紀余』卷一にも、蘇門答刺国（スマトラか）に海馬が群棲し、馬と竜の混血種としている。また石田英一郎氏も、海馬に相当するギリシャの Hippocampus に言及され、キジール千仏洞壁画上に描かれた「後半身蛇形で双尾有翼の海馬」はその伝流であることを指摘してお

られる。

以上の海馬は、いずれも竜馬もしくは水馬の信仰と深くかかわっている海馬であって、『博古図』の海馬とは直接関係のないものと考え、天馬もある部分では、もちろん竜馬・水馬信仰と結合するのであるが、すくなくとも『博古図』の編者においては、天馬をこのようなものとしての海馬と考えられていたとは思われず、みずから「総説」に書いてあるごとく、かれらにとって天馬は天馬以上でも以下でもなかったと私は考えている。

宋・宣和時代の汴京の景観を伝える孟元老の『東京夢華録』巻一、河道の条によれば、京内西河上の州橋（天漢橋）の兩岸石壁に「海馬・水獸・飛雲之状」が彫刻されていたという。それがどのようなものであったか想像しかねるが、川・橋・水獸などの繋がりから考えて、これも『博古図』の海馬とはその名の由来を異にするものであつたらう。明・王圻がその『三才図会』において、青海の馬を海馬としていることについては、樋口康隆氏の所説を紹介したおりにも触れたが、『それは『隋書』には「青海驢」とあるのを論証抜きで勝手に「海馬」と書き換えたもので、信用できない。王圻は同時にその馬形として、やはりひれ状のものを靡かせたものを図示しているが、それが何に基づいているのかまでは残念ながら判らない。ただ第一図に示した、海馬蒲萄鑑の外区に描かれた馬形に、極めてよく似ていることを指摘しておくに留める。

〔付記〕 図版は諸本中刷り上がりの比較的鮮明な「宝古堂重修本」（内閣文庫架蔵）によった。写真を提供して下さった同文庫に感謝申し上げます。

注(1) 樋口氏「高松塚古墳の副葬品と唐代出土品」（『仏教芸術』八七、昭和四七・八）。

(2) 服部稿「海獸葡萄鏡の編年的研究」（『早稲田大学大学院文学研究科紀

要』一、昭和三一・二）。ただし、これは昭和三〇年提出の修士論文のレジメである。

(3) 浜田耕作氏「ヒルト氏の支那古銅器殊に海馬葡萄鏡に関する研究」（『国華』一七四、明治三七）による。これはのち同氏『考古学研究』（昭和一四）に収録。

(4) 原田氏「海獸葡萄鏡に就いて」（『史学雑誌』二八〇一、大正六・一）。のち同氏『東亜古文化研究』（昭和一五）に収録。

(5) 正木氏「狻猊の話」（昭和五年講）。のち同氏『十三松堂閑話録』（昭和一二）に収録。

(6) 注(1)所掲。

(7) 石田氏「新版河童駒引考」二頁ほか。（『東大人文学研究叢書』一九六六）。

(8) 出石誠彦氏「天馬考」（『東洋学報』一八〇三、昭和五・三）。のち同氏『支那神話伝説の研究』（昭和一八）に収録。ここでは、その増補改訂版（昭和四八）によった。また注(7)石田氏論著をも参照。

(9) 注(7)所掲、一九頁。

（昭和五十四年一〇月稿）

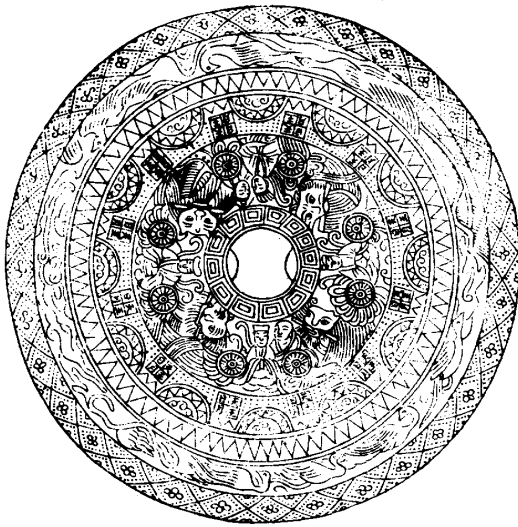
なお、本稿は文部省科学研究費補助金による研究の一部である。



第一図 海馬蒲萄鑑一(表12)外区の馬形



第二図 海馬蒲萄鑑一内区の馬形



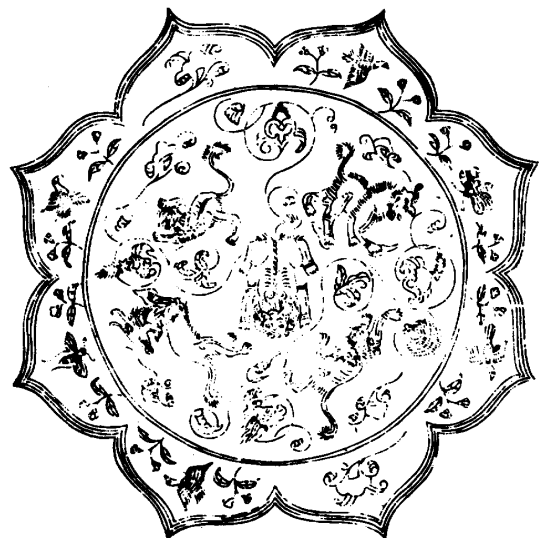
第三図 海獸鑑(表11)



第四図 海馬蒲萄鑑一(表12)



第五図 海馬蒲萄鑑五(表16)



第六図 海獸蒲萄鑑(表35)